

「闇」の絵師葛蛇玉：『雨月物語』『夢窓の鯉魚』 の新たな読みへ

井上，泰至

<https://doi.org/10.15017/4742009>

出版情報：雅俗. 12, pp.91-95, 2013-07-12. 雅俗の会

バージョン：

権利関係：The pictures in this paper are hided because of copyright protection.



「闇」の絵師葛蛇玉 —『雨月物語』『夢応の鯉魚』の新たな読みへ—

井上 泰至

二〇一一年九月二六日放送のBSNHK番組「極上美の饗宴」は、「アメリカ秘蔵の江戸名画」と銘打ったシリーズの三回目、「忘れられた傑作たち」と題して、葛蛇玉のことが取り上げられた。このシリーズは、ロスアンジェルス郊外のコロナ・デル・マールに住む富豪ジョー・プライス氏のコレクションの中から、特に若冲を中心に引き上げた企画だったが、三回目は無名の画家葛蛇玉の作品にもスポットライトを当てたものであった。

絵の世界では作品が少なく無名であるとはいえ、秋成の研究者はむしろ、近世文学の研究者で『雨月物語』を授業で扱った方なら、「夢応の鯉魚」の主人公興義のモデルが蛇玉であることは、中村幸彦先生も指摘されている^①から、知る人も多いことと思う。その驥尾に付して、私も片山北海撰の蛇玉の墓碑銘を取り上げていた^②ことが機縁となつて、番組に出てコメントをさせられた。が、その時考えたことが全て放送されたわけではないので、この誌面をお借りして報告させて頂きたい。

蛇玉がにわかに世間で脚光を浴びるようになったのは、プライスコレクション中の「雪中松に兎・松に鴉図屏風」(六曲一双・紙本墨画・各縦一五三・七 横三五三・〇)の存在による。今その絵の概要を、

二〇〇六年東京国立博物館で行われた「プライスコレクション」と江戸絵画」展の図録に載せられた作品解説(松嶋雅人執筆)を引いて紹介しよう。

全体に墨を引いて、漆黒の闇をつくり出し、塗り残した白い紙地が樹木に降り積もった雪となり、吹き散らした胡粉は、降り続く雪となつてあらわれる。駆け寄る兎の視線の先に松の木にもう一羽がしがみつき、梅の枝に止まる白頭の鴉(日本の画家はこの鳥をあくまで鴉として描いている)に、もう一羽が飛来して呼応する。闇の中の鴉と雪の中の兎という黒白の世界に息をのむ^③。

私も上野の展覧会では、この屏風を前に文字通り息を呑んだ。それは絵の力ばかりではない。それを引きだす照明装置によるところも大きい。従来の美術館における絵画の照明手法は「限りなくフラットな照明」であることを求められてきた。ところがこの絵の展示ではプライス氏が自らの邸宅で実験してきた結果編み出した「光の方法論」を学んで、自然光のように変化し作品に「表情」を与える陰影ある光を、調光装置や間接照明、あるいは障子に近いブラインドや、床・壁・天井が一体になった日本の伝統的な居住空間を再現する工夫^④を凝らしていたのである。

これは番組でもブライス氏が強調していたが、蛇玉のこのユニークな屏風の主題の一つは奥行と陰翳に富んだ「闇」にあり、それを有効に引きだすには、極限まで光を減らすだけでなく、月明かりや蠟燭の光を再現してそのゆらめきを間接に照らし出すような微妙な調光が必要である。防火上、また美術品の保護の観点から言って、実物の蠟燭など許されるはずもない。それをこの展示では独自の調光装置で再現した。結果、浮かび上がってきたのは、降る雪が浮いて見える遠近感のリアリティと、「闇」の奥に何かがうごめいているような怪しさを湛えた世界であった。テレビの方でもいろいろ工夫はしていたが、この展示の時のような、絵が潜在的に持つ闇の迫力を表現することは難しかったようだ。

電球のライトが一般化する以前の闇については、近代作家も幾つか文章を残しているが、有名などころでは谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」であろう。

又或る者は、暗い光線で胡麻化した美しさは、真の美しさでないと云ふであろう。けれども前にも述べたやうに、われわれ東洋人は何でもない所に陰翳を生ぜしめて、美を創造するのである。「掻き寄せて結べば柴の庵なり解くればもとの野原なりけり」と云ふ古歌があるが、われわれの思索のしかたは兎角さう云ふ風であつて、美は物体にあるのではなく、物体と物体との作り出す陰翳のあや、明暗にあると考へる。夜光の珠も暗中に置けば光彩を放つが、白日の下に曝せば宝石の魅力を失う如く、陰翳の作用を離れて美はないと思ふ。つまりわれわれの祖先は、女と云ふものを蒔絵や螺鈿の器と同じく、闇とは切つても切れないものとして、出

来るだけ全体を蔭へ沈めてしまふようにし、長い袂や長い裳裾で手足を隈の中に包み、或る一箇所、首だけを際立たせるようにしたのである⁽⁵⁾。

蛇玉の絵も、降り積もった雪は、何も彩色をしなくて、和紙の「白」をそのまま残し、漆黒の闇をその深さによつて描きわけている。だが、それだけではない。降る雪を表現するのに、白の絵の具に胡粉を混ぜて、点々と垂らしてゆき、その「光」と「動き」を、紙の「白」や、奥行きのある「闇」との対照のなかで表現した。まさに「陰翳礼讃」の法則通りである。

きつと、この屏風、まともなお寺に置かれたものではなかっただろう。冬の夜、料亭あたりで、人々をあつといわせたものであったに違いない。狂詩集『浪華獅子』（明和七年（一七七〇）序）巻一の「道頓行」には「表具師の襖蛇玉が描く」ともある。博物館を出た時以来こうした感想を持ち続けていたが、テレビの打ち合わせの時ディレクターにこのことを打ち明けてみたら、小林忠先生も同じ感想をお持ちだったと知らされて我が意を強くした。

近年北海撰の蛇玉の墓碑銘のもとになる言説が発見された。他ならぬ蛇玉自身による「蛇玉図」（写真）の存在である。竹に絡みつき、玉を啜え、やや光鱗を供えた蛇が上から降りて鎌首をもたげた図を描き、左には大坂の漢学者河合鹿門の手になる賛を載せる⁽⁶⁾。今全文を紹介しておこう。

葛季原字子明、別号羅園、浪速一画史也。鑽仰此道、少時不鮮。一夜罷寐。恍惚之際、夢見一蛇。金鱗宛轉、委蛇腹行、而口含一珠。季原熟視、而不畏掬手授之。蛇吐而置之掌中、去不顧。醒而

茫然、一懼一喜。已而、又一夜、夙興収衾、牀上竟然得一珉。煜々如玉。季原又大駭取而葆焉。此珉、天陰則膚如沾、晴又如旧。徧問之、所識人皆聽而賀之。其事太實際也。嗟、天地曠渺、無不有。昔隋侯得明珠於靈蛇。則陰德之感不可誣也。季原之得珉似矣。仰其道所感。必有後日之駭歎。因号蛇玉、記始末之崖略、以為左券云。

丙戌三月之吉 鹿門河維明撰

「蛇玉」という変わった号は、彼の見た夢の中で、ぬっと蛇が玉を啜えて現れ、後日その玉を得たことに由来する⁽⁸⁾。北海の碑銘によれば、夢を見たのは「丙戌」、即ち明和三年（一七六六）二月二十二日の夜ということになっているが、鹿門の賛は同年三月となっているからこれも符牒が合う。さらに、この鹿門の賛からは、その玉が雨の降る闇の中では、しつとりと濡れたような光を放っていたという新たな情報を得られる。

夜光の玉の不思議な体験が、この画家のトレードマークとなっていたわけだが、この話はどうも胡散臭い。「蛇玉図」は図柄こそ異同があるが複数残っており⁽⁹⁾、しかもこの賛は刷り物だからである。つ

まり蛇の玉を得たという説話は、宣伝用でもあったようだ。

この絵を展覧に供した千葉市美術館・静岡県立美術館の展覧会『伊藤若冲——アナザーワールド——』の図録の解説（福士雄也執筆）によれば、「画人蛇玉として歩み出すことを高らかに宣言するかのよう」な画で、賛文が刷られていることから、「同様の作例が数多く制作され、いわば名刺代わりとして自らの売り込みのために制作されたのではないか」という⁽¹⁰⁾。

ただし、「蛇玉」と名乗ってしまったら、彼は「光」と「闇」の画家として、自身にプレッシャーを課することになる。そのなかで出来た傑作が、プライスコレクションの「雪中松に兎・梅に鴉図屏風」ということなのだろうか。屏風は、安永三年（一七七四）筆で、それは『雨月物語』刊行の二年前のことであった。

さてこのような蛇玉についての新たな情報が、「夢応の鯉魚」の読みにどう影響するかである。蛇玉が賛を刷ってまで蛇玉図を量産していたということであれば、サロンの色彩が強い大坂の文芸界⁽¹⁾ではかなりの噂になったと見るべきであろう。『雨月物語』の序文は周知の通り、

り、明和五年三月であるから、

蛇玉の号の由来となる事件は直近の珍事と言え、「夢応」の鯉の絵を得意とした画僧興義の設定から、同じく鯉の絵を得意とした「夢応」の画僧であった蛇玉のことを想起するのは、当時の大坂文壇およびその周辺の読者

「蛇玉図」

（個人蔵、千葉市美術館・静岡県立美術館『伊藤若冲—アナザーワールド—』（二〇一〇年四月）より転載）

にとつては容易なことだったことが見えてくる。

「夢応の鯉魚」の興義は、鯉の絵を独占した言い訳に、魚の命を助けてやる放生によって画いた絵を凡俗の者に渡すわけにはいかないと言っており、「魚服記」等原拠にはないこの設定を秋成は物語の導入とし、作品末尾で「仏弟子を害する例やある」と呼応させている。自ら絵に「夢応の鯉魚」と名付けて絵を独占したこの興義への皮肉な設定は、蛇玉のやや宣伝めいた逸話の伝え方と相通ずる部分もあり、売名の姿勢を忌み嫌う秋成の毒が興義の設定に反映した可能性も出て来た。また、鯉の絵を人に渡そうとしなかった興義に比べ、蛇玉図をばらまいた蛇玉はより劣ることにもなる。

さらに、鹿門の賛には、蛇玉の不思議な体験の前例として隋候の玉の故事が挙げられているが、これも碑銘にはなかった。砂の中で死にかかっていた蛇を救ってやった隋候に、帰り道で蛇が玉を咥えてやってくる。気味悪がった隋候はこれを受けとらなかったが、その夜の夢に蛇を踏んだと見て覚醒すると足元に明珠を得た、という『淮南子』以下諸書に見える説話だが、蛇の報恩を鯉の報恩にずらせば「夢応の鯉魚」となる。隋候の玉については、浅井了意『戒殺放生物語』やその原拠の雲棲株宏『戒殺放生文』を考えたことがあった¹²⁾が、直接にはこの鹿門の賛が意識された可能性を考えるべきだろう。

そして、そのように秋成が蛇玉の売名的行為には批判的であったとしても、なおその絵の技量は認めていた可能性を否定できない。蛇玉が「闇」の絵師だとしたら、秋成もまた「闇」の作家であることには間違いないからである。

比良の高山影うつる、深き水底に潜くとすれど、かくれ堅田の

漁火によるぞうつつなき。ぬば玉の夜中の濁にやどる月は、鏡の山の峯に清みて、八十の湊の八十隈もなくておもしろ。沖津嶋山、竹生嶋、波にうつろふ朱の垣こそおどろかるれ¹³⁾。

注

- (1) 『中村幸彦著述集』第六卷（中央公論社、一九八二年）「秋成に描かれた人々」。
- (2) 『雨月物語論——源泉と主題』（笠間書院、一九九九年）「夢応の鯉魚」試論——付 葛蛇玉について。
- (3) 『ブライスコレクション 若冲と江戸絵画』展図録（二〇〇六年七月、東京国立博物館）。
- (4) 注(3)。
- (5) 『谷崎潤一郎全集』第二十卷（中央公論社、一九八二年）五四五～五四六頁。MIHO MUSEUM『若冲ワンダーランド』（二〇〇九年九月）中の岡田秀之の「蛇玉図」の解説によれば、賛の執筆者は若冲に絵を習ったとされる、相国寺一一五世、維明周奎（一七三一～一八〇八）とされているが、それでは署名の「鹿門河」が説明できない。河合鹿門は、名、維名、字、子南。生没年未詳ながら、『大阪人物誌正編』『大阪名家著述目録』に漢学者として登録され、延享五年（一七四九）の朝鮮通信使との漢詩唱和集『和韓唱和録』（村上秀範編、同年五月刊）に、大坂を代表する漢詩人の一人として名を連ねている（高橋昌彦『朝鮮通信使唱和集目録稿（二）』「福岡大学研究部論集（人文科学）」三〇六、二〇〇九年五月）から、こちらが該当すると思われるべきであろう。
- (7) 千葉市美術館・静岡県立美術館「伊藤若冲——アナザーワールド——」（二〇一〇年四月）に蛇玉図掲載。画には「蛇玉山人季原」の署名と「子明之印」（白文方印）「蘿園圖書」（朱文方印）が捺されている。個人蔵。
- (8) 「葛」は蛇玉の姓「谷八（こくやつ）」をつづめたと北海碑銘は伝える。

- (9) 注(6)(7)。
- (10) 福士は、MHO MUSEUM『若冲ワンダーランド』に載る蛇玉図の賛文と比べ、こちらの方が鮮明に刷られていることも指摘している。絵の制作も賛の刷も複数回に及んだ可能性が高い。
- (11) 長島弘明『秋成研究』（東京大学出版会、二〇〇〇年）『雨月物語』における作者・書肆・絵師・読者。
- (12) 注(2) 前掲書『雨月物語』と当代。
- (13) 鶴月洋・井上泰至訳注『改訂版雨月物語』（角川ソフィア文庫、二〇〇六年）二三九～二四〇頁。